

農業の楽しさ体験しました

3月31日、西下弓田の水田でりんぼかん保育園の園児が農業体験を行いました。これは、りんぼかん保育園の保護者、松田朋和・香里夫妻が「農業の楽しさを知ってほしい」と企画、自身の水田を提供したものです。園児たちは田植え機に交代で乗った後、裸足になって水田に入り田植えも体験しました。



交通安全を心がけましょう

4月6日、国道220号高松トンネル西側駐車帯で、春の交通安全運動街頭キャンペーンがありました。市交通安全協議会、市交通安全協会、市交通安全協会など約50人が、志布志市方面からの通行車両にチラシなどを手渡し交通安全を呼びかけました。6日現在、市では死亡事故ゼロ1169日連続中です。



アジサイ植栽の記念碑建立

4月11日、ふるさと林道小瀬・風野線でアジサイ記念碑の除幕式がありました。記念碑は広野歩こう会（黒原正宏代表・18人）を中心とした植栽活動を顕彰しようと市民有志が建立したものです。同林道ではこれまでの植栽により6,000本のアジサイをはじめモミジやヒガン花が四季折々に市民を楽しませています。



笠祇小児童が田植えを体験

4月14日、中山間地域等直接支払制度に取り組んでいる笠祇地区でもち米の田植え作業体験がありました。体験には、笠祇小学校の児童9人と保護者3人、先生4人も参加。この日は天気も良く、楽しく田植えを体験しました。8月上旬には稲刈りを、来年1月には餅つき大会を行い、みんなでおおいしく味わう予定です。



自衛艦「ゆら」福島港に寄港

4月16日、海上自衛隊の輸送艦「ゆら」が福島港に寄港、同港で歓迎セレモニー（海上自衛隊艦艇仲間協力会主催）が行われました。「ゆら」は沿岸海域のへき地や離島への物資・人員を輸送するために建造された中型艦です。17日には午前・午後に分けて艦内を一般公開し、翌18日には次の寄港地へ向け出港しました。



太鼓の指導にも熱が入る



二女の真弥さんも助手として現地に駆け付けた(写真中央)

3万人の大観客。日本から皇太子さまもご臨席になり、いよいよ演奏開始。この1年間で一番の音の揃い具合の大成功。観客はスタンディングオベーションでたえ、割れんばかりの大喝采となりました。心配していた入退場も含め、割り当てられた10分内に見事収めました。地元紙ニッケイ新聞（日本語版）は「一糸乱れぬ迫力の千人太鼓」とたたえ、報じました。

千人太鼓終了後も基本、打法、知識のレベルアップを図るなど、和太鼓普及のためブラジル国内を奔走。その活動距離は8万kmを超えました。こうした活動の結果からJICAの推薦を受け、今年3月15日に天皇皇后両陛下との御接見が実現。活動状況の写真を使用し、両陛下にその活動を説明しました。

11月に再びブラジルへ。今年2月まで、さらなる和太鼓の普及に取り組みました。6月にもブラジルに渡る予定です。2007年に比べ、現在では和太鼓人口・チーム数も増え、ブラジル太鼓協会の中にもリーダーが育ってきました。「今後も体が許す限り、継続して活動を続けていきたい」。養輪さんは、今後もブラジルで和太鼓の心を伝えていく覚悟です。



「ブラジル・日本移民100周年記念式典」での千人太鼓の演奏

派遣の目的は和太鼓の基礎拡充、リーダーの養成、地方での普及など、ブラジルに和太鼓を根付かせること。中でも2008年6月21日にブラジル・サンパウロで開催された「ブラジル・日本移民100周年記念式典」で披露された「千人太鼓」を指導し成功に導くことは、重要な難しい仕事でした。

千人太鼓参加者への指導が始まりました。サンパウロのチームには直接、サンパウロ以外の地方では数カ所に拠点を設置、多い時では十数チーム、2〜3

手520mの長さの会場で大鼓を打つために、会場のところどころにスピーカーを設置、中央で打つ鉄管の音を流しました。さらに60人の指揮者を配置することで、広さによるリズムのバラつきを解消できました。

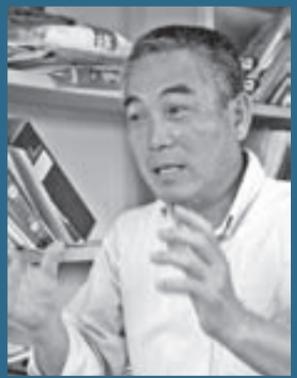
申間くるみ太鼓の代表を務める養輪敏泰さん（61歳）。2007年7月から2009年7月までの2年間にわたり、日本太鼓連盟からの推薦を受け、JICA（国際協力機構）のシニアボランティアとして、ブラジルに派遣されました。

ブラジルではサンパウロに活動拠点を構えました。千人太鼓の状況を確認すると、打ち手は600人程度、使える太鼓は700個程度。本番まで1年もない中、不安はさらに大きくなりました。しかし、準備を進めるにつれ打ち手の人数も増え、本番前日には1,200人、最終的には1,187人の千人太鼓となりました。

00人を集め指導しました。演奏の練習が順調に進む一方、心配だったのが本番での入退場。会場は本来カーニバルで使用する長さ520m、幅12mの特殊な形状である上、主催者から千人太鼓に与えられた時間は10分。6分の演奏時間を除き、入退場をわずかに2分ずつで行わなくてはなりません。しかし、かつて所属した消防団での規律訓練を生かし、会場の完成が本番前日でありハーサルも完全にできない中、その難題もなんとかクリアできました。

和太鼓の心をブラジルに伝える

JICA（国際協力機構）のシニアボランティアとして、2007年7月から2009年7月までの2年間、ブラジルで和太鼓の指導に当たった養輪敏泰さん。日本移民100周年記念式典での「千人太鼓」の大成功など、現地での活動内容や苦労話などを、ご本人にお伺いしました。



養輪 敏泰さん
(福島地区・上小路)
財日本太鼓連盟1級公認指導員